

## イベントを通して出会う



子どもから大人まで、各層に届く場面・機会を考え  
県内外で実施しました。





# ちまどん in ヒロース

横浜・鶴見沖縄県人会

2022.11/26(土) 10:00~12:00

おきつる青少年育成会館 3階

形式/対話形式によるトークとワークショップ

参加者/24人

横浜・鶴見県人会会員、鶴見区在住の方々、  
NPO関係者、沖縄をルーツにもつ日系の方々、  
一般参加者

## イベント内容

- 横浜・鶴見沖縄県人会 金城京一会長ご挨拶
- 島津典子(女性力・平和推進課課長)挨拶  
沖縄県の「平和へのおもい」  
沖縄県の平和啓発の事業紹介
- ワークショップ
  - ・横浜のウチナンチュのお話  
藤浪海さん(関東学院大学講師/鶴見県人会幹事)
  - ・戦後、沖縄から鶴見に渡ったうちなんちゅのお話  
仲宗根保さん(鶴見県人会)
  - ・「世界のウチナンチュと平和」  
ファシリテーター:内山直美(伊良波中学校教頭)



📷 「世界のウチナンチュと平和」の学びワークショップの様子。写真をもとに物語をグループでつくる様子。

届けた、うむい(思い)

朝ドラ「ちまどんどん」でも描かれていた通り、神奈川県横浜市鶴見区はおよそ三万人ともいわれる多くの沖縄ルーツの人々が暮らし、沖縄関連のイベントが開かれるなど、関東有数の沖縄タウンとなっている地域です。

鶴見沖縄県人会館を会場とし、戦後の「出稼ぎ移住」「世界・県外のウチナーネットワーク」を振り返り、沖縄からの平和発信を共有する時間となりました。

## 実施結果

イベント参加者

**24人**

横浜・鶴見沖縄県人会との共催  
沖縄県系人とのパートナーシップ

アンケート結果

本事業を通して平和への理解が  
高まった(とても高まった・高まった)

**100%**



📷 左上:内山直美さんワークショップ解説 右上:金城京一県人会長挨拶  
 左下:仲宗根保さん講話 右下:沖縄戦に関する展示

## 協力者の声

移民1世が世界各地でどのように生活していたのかを写真を通して考える内容と、沖縄戦当時の移民2世の活躍について考えました。2つのワークショップに関心を持って参加して頂き、沖縄移民教材への関心の高さを実感しました。

鶴見区は戦前戦後、多くの沖縄県系の方々が出稼ぎ労働者として根付いた地です。その後も沖縄の文化や歴史を大事にされ受け継がれています。昨年度は、沖縄県の復帰50年やNHK朝の連続ドラマ「ちむどん」で話題となり、多くの方が感心を寄せる場所となりました。このように、沖縄県とゆかりの深い地が全国にあることを知るきっかけになったことも貴重な経験でした。(内山直美・伊良波中学校教頭)

## 参加者の声

- ・沖縄の歴史を深く知れて、改めて沖縄に対する理解が深まりました。世界と沖縄のつながりを大事に、人とのつながりを大事にすることは今でも受け継がれていると思います。
- ・沖縄人の誇りは一人ひとり違うと思います。「沖縄我が故郷」を離れてはじめていろんなことを思うようになり、心情があります。人々に誇りを感じます。
- ・仲宗根保さんの性格の朗らかさがあり、苦労話、本土の方々とのコミュニケーションについて知れた。
- ・内山直美先生の移民の学び、平和のワークショップで面白く学ぶことが出来ました。

## 横浜・鶴見沖縄県人会(鶴見沖縄県人会館)

〒230-0042 神奈川県横浜市鶴見区仲通3丁目74-14(おきつる青少年育成会館 3階)

大正末期から昭和初期にかけ、多くの沖縄出身者が鶴見に仕事を求めてやってきた。とりわけ耕作面積の少ない県北部出身の次男三男の方が多かった模様。これらの多くの方は地縁血縁を頼って鶴見へ、そして、伊江、名護等、出身地ごとに「島んちゅ会(郷友会)」を結成。昭和3年には名護出身者によって「鶴見沖縄会館」が作られたという記録もある。出身地別の集まりが、戦後の鶴見沖縄県人会へとつながる。戦後、昭和21年(1946年)に結成された「沖縄人連盟鶴見支部」が、昭和28年(1953年)に「鶴見沖縄県人会」と改称し、鶴見沖縄県人会が発足。



県人会ホームページ



# ちまどん in ヒロース

届けた、うむい(思い)  
教育現場を实际持つ教育者や関係者が集い、  
ネットワークの構築と、教材開発、カリキュ  
ラム開発を行いました。

～命の対話～(音楽演奏&ワークショップ)

2023. 1/21・22(土・日) 9:00~12:00

関西セミナーハウス

形式/対話形式によるトークとワークショップ

参加者/38人

教員、教員委員会、NPO関係者、一般参加者

## 実施結果

イベント参加者

**38人**(2日間累計)

沖縄県から学校教員および学芸員を派遣し  
戦争と平和、「沖縄のこころ」を学ぶ時間の提供

アンケート結果

本事業を通して平和への理解が  
高まった(とても高まった・高まった)

**86.6%**

## イベント内容

### 1日目

- あいさつ・メッセージ(沖縄県・比嘉)
- 沖縄文化紹介  
大城敦博さん「琉球ヴァイオリンの演奏とお話」
- 平和教材ワークショップ  
沖縄戦とガマの体験ワークショップ
- 沖縄からの実践共有  
豊見城中学校 大城真紀子さん

### 2日目

- 読谷村に残る資料とその活用について  
(読谷村史編集室、中田耕平さん)
- 意見交換会



📷 琉球ヴァイオリン演奏を通じて平和の音色を届けて下さった大城敦博さん



📷 左上:参加者の平和メッセージ 左下:大城真紀子さん(豊見城中学校)発表 右上:パネル展示の様子  
右下:中田耕平さん(読谷村史編集室)発表

## 協力者の声

- 「チャーとうつくわあ かみていんまりてい ちよーがすらわからん…(直訳:どんな徳を頭に乘せて生まれて来ているのかわからない…)」腕の中の乳飲み子と、かたわらの子ども達の将来に思いを馳せ、祖母は手渡された手榴弾を使わないことに決めました。彼女のひと言から受け継がれた音楽は、聴く人に「沖縄には昔からヴァイオリンがあったのか!？」と問われ、海外で演奏した際には「どこの国のものとも違う独自の音楽だ」と評価されるものに育ちました。その「琉球ヴァイオリン曲」を今回、沖縄県主催のイベントで演奏させていただいたことが感慨深く、光栄です。ウチナンチュにヴァイオリンを持たせたらこんな音楽が生まれました。関心を持ってくれる方、弾いてくれる方も少しずつ増えています。いつかあなたの耳にも届きますよう。(琉球器楽「琉球ヴァイオリン」、大城敦博)
- シミュレーション教材「あなたの運命は?」の体験や琉球ヴァイオリンの演奏、京都、奈良、沖縄の学校での実践

を通して、平和教育について交流する貴重な機会となった。また、体験者との信頼関係を大切に読谷村の資料収集の取り組みを聴き、これからも協力して取り組んでいきたいと思った。(開発教育研究会、丸山まり子)

## 参加者の声

- 本当に学びの多い一日を過ごさせてもらい、ありがとうございました。まだまだ勉強不足の私にとって、たくさんの気づきをもらえる貴重な時間になりましたが、中でも、はじめにきかせていただいた、ヴァイオリンの大城さんがおっしゃった、「前例がないこと…これが戦争の始まりなんじゃないか。」とおっしゃった言葉がすごく印象的にのこっています。自分自身がすごくハッとさせられる言葉でした。
- 沖縄で新しい世代により、平和、戦争体験の学習が広がっていること。ワークショップ教材の現地、読谷村で資料の掘り起こしが進んでいること。その他のことから、直接の交流の機会を持ったことで、感じることや気づくことが多かったです。

## 開発教育研究会

開発教育研究会は、京都市比叡山麓にある関西セミナーハウスを活動拠点とし、参加型で学び合う「開発教育セミナー」の企画・運営をしている団体である。年間6回開催しているセミナーでは、一人ひとりが社会問題を理解し、共に生きることのできる公正な地球社会づくりに参加し、それを実現することを目指している。

<https://www.dear.or.jp/>



ホームページ

# 届けた、うむい(思い)

本事業のなかで、読谷村の明暗を分けた洞窟(シムクガマ、チビチリガマ)の学びと、歌手の玉城千春さんが沖縄アミークスインターナショナル中学校の生徒達と創作した歌「Hope Dream Future」を活用してきました。この教材の作られた舞台である読谷村で、ガマのシミュレーションの学びと、玉城千春さんと共に歌を制作した当時中学3年(現在高校2年生)の生徒たちの協力を得てワークショップを実施し、玉城千春さんのミニ音楽会を開催した。ファシリテーターは、高校生や大学生が務めました。



# ちまどん in ひろす

## 読谷村

2023. 2 / 26(日) 13:00~16:00

読谷村文化センター (中ホール)

形式/対話形式によるトークとワークショップ

参加者/83人

高校生、大学生、市民、教育関係者、一般、等

### イベント内容

○島津典子(女性力・平和推進課課長)挨拶

沖縄県の「平和へのおもい」

沖縄県の平和啓発の事業紹介

○ワークショップ

・チビチリガマ、ガマワークショップ

神山怜奈(沖縄NGOセンター)

山岸奈々未(名桜大学学生)

・高校生ワークショップ

「Hope Dream Future」の歌を通して考える

ワークショップ

平良遊帆、新城有希葉、比嘉秀千代、

宮城鴻太、沢紙未梨凜、与那覇陽海

・歌手 玉城千春さん 歌とお話の時間

・総合司会:野底美智代(フリーアナウンサー)

### 実施結果

イベント参加者

**83人**

読谷村・読谷村教育委員会との共催  
高校生・大学生運営によるワークショップ開催

アンケート結果

本事業を通して平和への理解が  
高まった(とても高まった・高まった)

**95%**



📷 「Hope Dream Future」の歌を通して考える  
ワークショップを担当した高校生メンバー



📷 左上:ワークショップの様子 右上:玉城千春さんの語り 左下:ワークショップ参加者 右下:ワークショップを進行する高校生

## 担当した高校生、大学生の声

最初は、軽い気持ちで取り組んだプロジェクトでしたが、気づいた時には本気で取り組んだ。沢山の人に紹介できた事はとても嬉しかったし、もっと多くの人に届けたい。(ひでちよ)

平和のありがたさを踏まえた上で聞く、生徒たちの歌詞や千春さんの歌声にも心を打たれた。こうした平和啓発活動に関わることの大切さも切に感じることができた。(こうた)

どうすれば多くの人にこの歌詞を心に響かすことができるか沢山考え、初めて自分が誰かに「平和」を伝えることにとても緊張した。同時に今度は私たちが平和を伝える番になると実感した。(ひみ)

この歌を通して少しでも多くの人が沖縄戦について知るきっかけとなり、さらに同じことが現実で起こらないように戦争の負の遺産を忘れてはならず、将来への夢や希望を持ってもらえたら嬉しい。(ゆほ)

難しかったです、いろんな意見が聞けて、機会があったら参加したいと思った。また、千春さんの歌声に感動し、私たちの今ある平和を大切にしよう改めて感じました。(みりりん)

中学生の頃に作詞した私たちの歌詞を、このように活用することができて嬉しい。今回参加者の皆さんと一緒に、異なる視点で歌詞を考察することができたのは素晴らしい機会だった。(ゆきは)

私はワークを担当するなかで参加者の様々な思いを聞くことができとても深いワークになったと思う。高校生たちのワークでは彼ら自身が考え行動する姿勢がとても力強かった。(山岸菜々未)

## 参加者の声

- 同世代の人と戦争について意見を交換したり歌詞から連想して戦時中の子供たちのことなどを考えるという学校の平和学習とは違う平和学習が出来て改めて戦争について考えることが出来たし、千春さんの歌には色々な思いが込められておりその歌には人を動かす力がありとても感動しました。
- 企画した生徒さんの純粋な気持ちに胸を打たれた。
- 玉城千春さん、ひとつひとつの素敵なメッセージに感動! 本当、愛に溢れている人だなということ、平和の想い、子ども達への繋ぐ未来への想いを大きく持っている人だなあと思いました。まわりのみんな生きることも大切なことを大切にすることも諦めない。



📷 記念館 1階第二展示室

### 命の対話 講演会

## 「私が、対馬丸を語り継ぐ意味」

- 平良啓子さん(対馬丸生存者・語り部)
- モデレーター:平良次子さん  
(南風原文化センター館長/対馬丸記念館理事)

2022.11/22(火) 18:30~20:00  
対馬丸記念館 (那覇市若狭)

形式/対面による講話

参加者/21人

教育関係者、平和ガイド、学芸員等

### 対馬丸記念館とは

対馬丸記念館は、対馬丸事件の犠牲者の鎮魂と、子ども達に平和と命の尊さを教え、事件を正しく後世へ伝えるため、撃沈されてから60年目の2004年8月22日に開館。館内では、対馬丸事件の概要や漂流の記録、生存者の苦悩を伝える展示の他に、犠牲者の遺品や遺影の展示を行っている。対馬丸の子ども達が夢見た「未来」、つまり、「今」を生きる我々は平和をどう繋いでいくのか。記念館では、改めて過去を振り返り、これからの未来を考えていく場所作りを心がけている。団体見学や語り部に関する予約なども受け付けを行っている。

【開館時間】9時~17時 ※最終入場は16時30分

【休館日】毎週木曜日、年末年始(12月31日~1月3日)

【入館料】大人500円 / 中・高校生300円 / 小学生100円

【所在地】〒900-0031 沖縄県那覇市若狭1-25-37

【お問い合わせ】TEL:098-941-3515 FAX:098-863-3683

📷 対馬丸記念館外観



# 届けた、うむい(思い)

対馬丸の生存者、語り部の平良啓子さんからのお話を、平良さんの娘さんであり、対馬丸記念館理事の平良次子さんを通じてお聞きしました。平和教育に取り組む教員、若者の参加を通して経験継承する時間となりました。那覇市に位置する対馬丸記念館において、多くの子どもたちの命を失った史実をお聞きし、併せて、沖縄と奄美地方を結ぶ戦争を通じた経験共有も行いました。

### 実施結果

イベント参加者

**21人**

戦争経験者、語り部による  
教育者や若者への講話

アンケート結果

本事業を通して平和への理解が  
高まった(とても高まった・高まった)

**100%**

### 対馬丸事件とは

昭和19(1944)年、沖縄にもいよいよ戦争の足音が近づき始め、老・幼・婦女子は県外へ疎開するよう指示されました。対馬丸は学童集団疎開の子どもたちや一般疎開の人々をたくさん乗せて8月21日に那覇港を出発しました。しかし、海はすでに戦場となっていたのです。出港した翌22日夜10時過ぎ、米潜水艦ボーフィン号の魚雷攻撃によって対馬丸は海に沈んでしまいます。乗船者1,788名(船員・兵員含む)のうち約8割の人びとが海底へと消えてしまいました。



📷 平良啓子さん

**次子**：対馬丸に乗る前の雰囲気というかそのお話を聞かせて下さい。

**啓子**：私は国民学校の4年生となり、昭和19年頃、私はその中でも軍国少女でした。皇民化教育が広がり、大きくなったら従軍看護婦になりたい、戦地で傷ついた兵隊さんの手当をしたい、これが女の子の憧れの職業でした。男の子は、特別攻撃隊、特攻兵になりたいといっていました。

（私たちの住んでいた）安波というところは山の中、戦争が来そうもない田舎の村にも疎開命令があり、「お前たちの親もお父さんもお兄さんも東京に行くんだったら、本土に行けば会えるから、行け行け」と言われ、私たちも疎開しました。

母は反対し、子どもを行かせたくないと言っていました。行きたがっていたのは6年の兄です。私も本土へ行くことは憧れでした。本土へ行けば汽車にも乗れる、電車にも乗れる、雪が見れる、その思いが強くて「行きたい行きたい」とせがみました。その時の隣にいる時子が一緒になって、行きました。村の人が、年寄り、女と子どもを行かせていました。

**次**：着いていて、那覇の人たちも、たくさんの沖縄中の子どもたちが集まるんですが、その時、どんな思いでしたか？

**啓**：8月21日、子どもたちは、2階建ての旅館に泊まったんですが、その時に日本兵が鉄砲を担いてパッパッパッと行進していく姿を初めて見ました。後でわかったことですが、対馬丸には北京から日本兵がいっぱい乗って沖縄に入ってきた話を聞きました。その人たちが沖縄に入っ

てそれで、那覇市内の学童がいっぱい出されて、兵隊が教室に入るようになったようで、やっぱり兵隊をたくさん寄せるために私たちは出されたという風に思います。

一泊して、いよいよ対馬丸が出発するわけですが、沖縄がずーっと消えていくのを眺めていて、見えなくなったから二人とも「来なければ良かったねえ、寂しいねえ、お母さんに会いたいねえ」と小さく漏らしたことがあります。

**次**：暗くなってから船の甲板に上がってくるように言われて、その時にしゃべるなど、静かにしなさいと言われた。

**次**：夜の10時過ぎ、熟睡しているときに突然起こった出来事をお話してもらえますか？

**啓**：バーンと爆発の音を聞いて、家族一人もいなくて、どんどん燃えて、船は傾くし、遠くの方の水兵さんが黙って動かない人がいる。私はどうしていいかわからないから「おばあちゃん、おねえちゃん助けて、どこ行った？」といっても返事はないし、学童たちもまとまっていて、もう「お母さん助けて、兵隊さん助けて、先生どこ行った」って…。一番怖いのは重油で、油が全部、船底から流れていました。私も目や口に油が入ってあっぴあっぴしてました。

逃げ回る子どもたちを兵隊さんか大人の先生かが捕まえて、無理やり海にポンポンポン投げ入れている人もいます。

遠くの方で「啓子、時子早く飛び込めー」と姉の声が聞こえるんです。「お姉ちゃんまってー」と言っても、どこに行ったか分かりませんでした。帆柱が傾いたところに「兵隊さん助けて」という母親がいて、子どもは泣くし、恐ろしい波がありましたが、泣いたらおしまいと泣きませんでした。一人で頑張るしかないと思った時に、小さな空になった醤油樽が浮かんできて、そのおかげで顔が上がって助かったんですね。人間の女の子が私にぶつかってきので、捕まえてみると、いとこの時子でした。気が強いのは私、あっちはちょっと気が弱い、優しいし、わんわん泣くんですよ。時子を連れてきて醤油樽に移して浮いていました。「離すなよ、泣くなよ」と言って、大波がボンとぶつかってきたときにその時子が波と一緒に引き込まれていったんです。「時子どこ行くの、どこ行くの？」と私は一生懸命呼び続けました。